

日笠完治先生との思い出

駒澤大学非常勤講師、清和大学非常勤講師

弁護士 大塚翔吾

第1 はじめに

この度ご退職されました日笠完治先生と私との出会いは、今から21年も前のことですが、ついに退職の日が来てしまったと非常に寂しい気持ちです。

このような場合は、本来であれば先生の輝かしい研究実績をご紹介する場なのであらうと思います。しかし、実務家で研究者としては端くれに過ぎない私が先生の輝かしいご実績を紹介することはかえって失礼に当たると思い、ここでは、先生と私との思い出を語りながら「恩師」である先生の人柄をご紹介させていただければと存じます。

第2 大学での思い出

高校時代野球に明け暮れていた私は、特にこれといった明確な理由のないまま駒澤大学法学部に入学しました。憲法に興味はなく明確な理由はやはりなかったのですが、第一志望であった他のゼミの抽選に漏れてしまったため、(だいぶ失礼になりますが)「とりあえずやってみるか」という軽い気持ちで日笠先生の基礎ゼミを受講しました。いざ受講してみると、先生の柔らかいお人柄、そして今と変わらない憲法、そして学生に対する情熱あふれる講義に魅了されました。毎週、ゼミが楽しみになり、3年次には当たり前のように日笠先生のゼミ(以下、「日笠研究会」といいます。)に入会しました。

日笠先生はいつもニコニコしながらさっとゼミ生に対して高いハードルを課していたことが印象に残っています。例えば、先生は、私たちゼミ生がイェーリングの「権利のための闘争」やジャン=ジャック・ルソーの「社会契約論」といった憲法に関する基本的な文献を読んでいないことを知ると、「1週間後のゼミまでに3冊の本を読んだ上でのレポート書いてきて」と課題をさっと課されました。また、これもニコニコしながらさっと、「卒論は大学院修士レベルの内容で、文字数は8万字以上、参考文献も50本以上」などと大学生の私たちにとってはかなりハードルの高い課題を課されました。私たちゼミ生は、先生がニコニコと嬉しそうにそしてさっと課題を出す姿に、「先生の期待に答えなくては」との思いから、皆真剣に課題に取り組みました。今思えば、先生のお人柄が、私たちゼミ生を高いハードルに何の疑問もなく挑むようにさせ、そして私たちを成長させてくれたのだと思います。

また、日笠研究会では、先生の禅問答のような「修行」的質問も印象に残っ

ております。この質問に対して、何とか先生を満足させようと理論武装してゼミに挑みましたが、結局最後まで先生の質問に全部答えきることはできませんでした。この質問の際も先生はいつもニコニコと朗らかでした。そして、先生は、私たちゼミ生の回答、意見を決して否定せず、受け止めて下さいました。先生の禪問答のような質問に何度も「闘い」を挑んだことにより、法曹として必要な論理力が鍛えられました。この「修行」は現在の私を作っているといっても過言ではありません。

私の進路を決める後押しをして下さったのも先生です。私は、元々教員志望でした。しかし、日笠研究会で学んだ法を勉強することの楽しさから、法の専門家である弁護士として子どもたちに関わる仕事に就くこともあり得るのではないかと悩んでおりました。そのような中日笠先生は、「大塚くんのような正義感を持った人は法曹になるべきだ」私の背中を押して下さいました。この先生からの言葉で私は迷いが吹っ切れ、弁護士を志望するようになりました。そして、「恩師」である先生が所属している駒澤大学法科大学院への進学を決めました。

その後、駒澤大学法科大学院でも先生の講義を受講し、司法試験に合格することができました。先生は、現在の私を作って下さった私の人生にとって大きな存在であり、まさに最大の「恩師」です。

第3 弁護士になってから

弁護士として子どもたちと関わったり、いわゆる「日の丸君が代訴訟」等の憲法訴訟に関わる中で、私の中に「教壇に立ちたい」と思いが再燃しました。その矢先に先生から駒澤大学法科大学院の憲法の講義を一緒にやらないかという話を頂戴しました。研究者ではない私が憲法の講義を受け持つことに若干の不安はありましたが、「恩師」の先生からお声がけいただいたことは本当に嬉しかったことを今でも覚えております。

憲法特別演習という講義では、先生との共同授業を担当させていただきました。前半部分で日笠先生が学術的専門的講義を行った後、私が実務家としての観点を踏まえながら解説講義を行うというものでした。私としては「恩師」と共に教壇に立たせていただけたことは大変光栄で、幸せな時間でした。この講義でも先生は私の拙い講義を決して否定することなく、ニコニコと朗らかに受け止めて下さいました。

第4 最終講義

日笠先生の最終講義は2024年2月17日に駒澤大学深沢キャンパス内120周年アカデミーホールにて行われました（同最終講義に基づく論文は駒澤法曹第20号に掲載されております）。

同講義では、憲法学という範囲にとどまらず、人間とは何かという哲学、生物学等の他の学問を踏まえた上での「憲法学」という非常にスケールの大きい

ものでした。時間の都合上、その全部をご教授いただけませんでしたでしたが、学生時代を思い出し、先生の熱のこもった講義に時間を忘れて聞き入ってしまいました。

第5 終わりに

日笠先生は、憲法学者として輝かしい実績をお持ちだけでなく、そのお人柄もまさに「先生」と呼べる尊敬のできる方です。私にとってはまさに最大の「恩師」です。これからも先生の教えを元に、ニコニコと朗らかに人に優しい日笠憲法学を、実務家としてそして研究者の端くれとして受け継いでいきたいと思えます。

先生にはこれからも元気で居続け、私たちをニコニコと朗らかにやさしく見守っていただきたく思います。

この度はご退職おめでとうございました。